

【7】 考察と今後の課題

中学部の生徒は人と関わることを望んでいるが、相手にうまく気持ちが伝わらないため、やりとりに拡がらない。こういう実態を持つ生徒には

- ・より豊かにコミュニケーションを図るための知識や技能を学ばせる。
- ・人との関わりを大切にして活動しきらせ、十分に生かし使う場を保障する。
- ・心とからだを自分なりに受け止めみつめさせながら、自己を向上させようとする意識を育てる。

という方針で臨むことが大切であり、そうした取り組みをすることによって、やりとりの力は育つ。

この仮説に基づき、よりよい教育課程の編成や授業づくりの模索を続けてきた。

指導の実例や、この実践で得られた成果の報告を見てもわかるように、変容と思われる姿を生徒の言動の中に、たくさん認めることができる。生活単元学習の話し合い場面でのやりとり、休憩時間中の、生徒同士の楽しそうな関わり合い、朝の会・帰りの会で質問をして、友だちの発表の内容をよく知ろうとする姿、聴覚障害者の卓球世界大会でチャンピオンになった房:京:さんの話を聞いて、自分ももっと頑張りたいとしっかりした文で綴ったS男の作文等も、変容を伺わせる例である。3年間取り組んできた教育課程の編成や授業づくりへの模索は、それなりの成果をあげたように思う。

しかし実践を続ける中で、次のような反省点が浮き彫りとなり、次年度への課題として残された。

- ① 教育課程の核となる生活単元学習では、単元の構成や題材の配列に検討を重ね、ダイナミックな活動を展開する中で、生徒の活動意欲を生み出した。学級単位での学習や学部縦割りグループでの学習を通して、話し合い関わり合う楽しさを味わわせることもできたように思う。しかし、一単元の配当時間が限られているために、題材と生徒を一体化させることができないままに学習を進める不十分さや、不満足さを感じるがあった。何をどう教えるのかを十分見極めた上で、単元の構成や題材の配列を見直してみたい。精選が課題である。
- ② 新しい形での課題学習は、個々の課題を明確にし、生徒に主体的な取り組みの意欲を生んだ。その指導に担任が当たるメリットは大きい。一方で、取り組みの方法や評価に十分目が届きにくい。繰り返しという点には問題がないが、積み上げるという点では検討すべき課題を残している。また基礎学力は、実際の生活に生かし使いながら確かな力としていくものである。今取り入れているプリント学習を生活にどうつなげるか、この点についての検討と見極めも必要である。
- ③ 成果の例としてやりとりの芽の育ちを述べたが、それを定着した力として評価するのは早計である。教師の仲立ちに助けられている部分が、まだ多い。やりとりの基本は、話すことと共に聞くこと、聞き取ることにある。「聞く」意欲や姿勢を育てる指導にさらに取り組んでいきたい。これは授業づくりにおいて、指導者の関わり方に視点のあたる課題である。
- ④ 家庭との連携については、今まさにその子の育ちに必要な、具体的な情報を交換し合うことをめざして取り組んできた。通学の自立や身辺処理の意識化が確実に向上した事例がある一方で、学校からの一方的な連絡に終わりがちな事例もある。家庭をどう巻き込むか、さらに考えてみたい。